

北九州市立大学文学部紀要

(人間関係学科)

第 20 卷

目 次

田島 司

自己の一貫性と認知的不協和

—自己の多面性は必ず認知的不協和をもたらすのか— 49

北九州市立大学文学部

2013年3月発行

自己の一貫性と認知的不協和 —自己の多面性は必ず認知的不協和をもたらすのか—

田 島 司

Self-consistency and cognitive dissonance:
Multiplicity of the self always cause cognitive dissonance?

Tsukasa Tajima

要 旨

自己の多面性に違和感を感じるようになることと、自己の多面性を受け容れるようになることについて、それぞれの規定因を論じ、それらの相関関係、および自尊心との関連を検討した。質問紙法によって、家族、学科の友人、サークル、アルバイトの4つの場面において、“役割の内面化”と“手段性の認知”の程度を測定した。分析の結果、家族とサークルにおける“役割の内面化”の程度は自己の多面性への違和感と正の相関関係にあり、また、家族とアルバイトにおける“手段性の認知”は自己の多面性の受容と正の相関関係にあった。さらに、アルバイト以外の3種の場面においては、“役割の内面化”の程度が高く、“手段性の認知”の程度が高い場合に自尊心が高かった。つまり、多面性による認知的不協和を極力避けようと役割の内面化を避けるのではなく、役割を内面化して多面性に違和感を感じるようになったとしても、その上でさらに多面性を受容するための条件が整うことで、精神的健康が最も高まることが示唆された。

キーワード：自己の一貫性、自己の多面性、認知的不協和、自尊心

問 題

自己に一貫性を求める傾向があることは古くから指摘されている。例えば Lecky (1945) は、“自己の個性を維持するために、個人は、内部的に首尾一貫している体系を形成するように、自己の説明を体制化しなければならない（友田訳, 1955, pp.93-94.）”と述べ、また、Rogers (1951) も、自己概念が流動し、変化している側面を認めつつも、基本的な部分は安定しており、それを保持しようとする傾向があることを仮定している。さらに、Erikson (1959) が、アイデンティティを定義する際に重要な要素として斉一性 (sameness) と連続性 (continuity) をあげ、そのように自己の構成要素が統合されていなければアイデンティティ混乱に陥ることを指摘したように、これは自己やアイデンティティというキーワードを論じた研究の中で中心的問題として古くから扱われてきたものである。本邦においても、砂田 (1979) は Erikson のアイデンティティ理論を実証するために、家族、市民社会、国家といった異質な共同性の場から生じる規範のずれや矛盾を測定し、それぞれの場で生じる諸自己

像のずれとアイデンティティが混乱した状態との関連を検討している。その結果から、場面間での自己像のずれはアイデンティティの混乱を引き起こす一つの原因であると結論づけている。

このように、自己の一貫性を求める傾向があるとすれば、状況に合わせて自己が多面的に変化することは何らかの葛藤を生み出すはずであるが、それを否定するかのよう現象も指摘されている。例えば高石（2000）は、団塊ジュニアの世代を移行期として、現代の若者の自己は断片化したまま統合されることなくばらばらで、一貫性がないことを悩んだりすることもなくなったと指摘する。また、大学生の自己のあり方について論じた渋川・松下（2010）も同様に、状況に合わせて異なる自己や変化する自己が現れても、そのような自己の側面を統合せずに断片化したままとらえる現代大学生の特徴に注目している。

また、自己が一貫性を維持しようとする傾向は、欧米と比較して東アジアの自己の方が弱いことを示唆する報告が近年の研究によってなされている。例えば Kanagawa, Cross, Markus, & Rose (2001) は、日本とアメリカの実験参加者を対象に4種の社会的状況における自己を記述させたところ、アメリカの実験参加者の自己記述の方が状況による影響をあまり受けなかったことを明らかにしている。また、Suh (2002) は、韓国とアメリカの学生を対象に5種の社会的状況について調査したところ、自己の一貫性と精神的健康との関連が韓国の学生はアメリカの学生に比べると弱かった。同様の結果は、オーストラリア、イギリス、ドイツなどの対象者を含めて検討した調査でも報告されている (Kashima, Kashima, Farsides, Kim, Strack, Werth, & Yuki, 2004)。

これらのことから、状況に合わせて自己が多面的になることに葛藤を感じず、あたかも自己の一貫性を求める傾向が弱い個人が存在するかのようにも思われる。しかしこのような問題を論じる場合には、自己の多面性に違和感を感じ始める条件についての問題と、自己の多面性を矛盾なく統合する条件についての問題とを区別する必要があるように思われる。

まず、高石（2000）や渋川・松下（2010）が指摘するように、客観的には異質なはずの多面性を保持したままであっても特に不快ということもなく、それに伴うはずの心理的緊張を低減させようとする動機づけが弱いという場合があるとすれば、それは他者との関係における希薄化に由来するのではないだろうか。若者の友人関係を検討した近年の調査によれば、全人格的な融合や深い関わりを避けるようないわゆる希薄な関係が築かれている場合があり（福重，2006；岡田，2007）、“空気を読む”などの表現が用いられるように、周囲に調子を合わせて当たり障りのない行動をする繊細な付き合い方に苦慮している姿も指摘されている（浅野，2006）。このような関係性を形成している場合には、そこで求められ、実行している言動が自分自身に囚っているとは感じられず、いわば仮面をかぶったような状態であると考えられる。そのように感じられている以上は、状況に合わせて多様な仮面を付け替えることにさほど違和感を感じないであろう。逆に言えば、当該の状況で期待される役割が内面化し、生起する言動が自分の主体性に因るものと帰属されることで、自己の他の側面との異質性や矛盾に対して認知的不協和が感じられるようになるのではないか。

そこで本研究では、役割を内面化することが、役割遂行に伴う自己の多面性に対して違和感を持ち始めることと関連するかを一つ目の検討課題とする。

ところで、自己に多面性が存在したとしても、それを統合することで認知的不協和を感じなくなるという機制も存在することが示唆されている。田島 (2008, 2010a) の調査では、例えば大学の友人のような、自己の内面性の共有を期待し、外的な課題があいまいな関係性では、自己が多面的であることが自己のパーソナリティへの関心を高め、抑うつ・不安を高めていたが、アルバイト場面のような関係で、外的な課題があり、ある目標に対する手段のための関係であることが認知されていると、自己が多面的であることは自己のパーソナリティへの関心や抑うつ・不安を高めないことが明らかになっている。さらに、田島 (2010b) の実験では、“本当の自分”と感じる自己の姿とは異なる自己を呈示する状況において、その時の自己が他者と手段的な関係にある場合には、それらの異質な自己の側面を統合的に説明できる例が多く、また、そのような統合的説明をした群においては、“本当の自分”と感じる性格から変化している程度は自己の異質感と関連がみられなかった。これらの研究から、他者との手段的な関係性における行動は、それが自己の多面性をもたらしているとしても、例えば「自分が望む〇〇のために△△をしたのだ」のように自分を納得させやすく、そのような自己の側面も不協和無く受け容れやすくなると思われる。

そこで本研究では、先行研究で検討されているのと同様に、他者との手段的關係によって自己の多面性を受け容れやすくなるかを2つ目の検討課題とする。

以上で論じたように、役割の内面化は自己の多面性に対して違和感を感じさせ、他者との関係における手段性は、自己の多面性を受け容れやすくさせることが予測される。言い換えれば、役割が内面化していないほど、また、関係に手段性を認知しているほど、自己の多面性に対して認知的不協和が生じないはずである。では、これらはいずれも精神的健康に対して肯定的な影響を与えるのであろうか。できる限り多面性による違和感を感じない方が良いというのであれば、役割の内面化の程度も弱いほど精神的健康に良いことが考えられる。一方で、役割を内面化することで、違和感を感じ得るような多面性を自己に内包したうえで、それを受け容れることが精神的健康に最も肯定的な影響を与えるということもあるだろうか。本研究では、役割の内面化と手段性の認知がそれぞれ精神的健康に与える影響についても探索的に検討する。

方 法

講義の時間を利用して、質問紙法により大学生122名(男性36名、女性86名)を対象に調査を行った。質問紙では、最初に Rosenberg (1965) の自尊心尺度 (山本・松井・山成, 1982) 10項目を用いて、“1: まったく当てはまらない” から “5: 非常に当てはまる” の5件法で回答を求めることで精神的健康を測定した。

次に、調査対象者となる一般的な大学生が頻繁に他者に接していると考えられる、“家族”、“学科の友人”、“サークル”、“アルバイト”の4つの場面それぞれにおいて、“役割の内面化”の程度を以下のように測定した。“(5種の各場面)で、まわりから期待される行動をする時、あなたはどのように感じますか?”と問い、“自主的に行動していると感じる”、“自分から進んでそうしていると感じる”、“その時の自分は本当の自分だと感じる”、“周りから言われるままに、ただ従っているだけと感じる(逆

転項目)”の4項目について、それぞれ5件法で回答を求めた。

続いて、“手段性の認知”の程度を以下のように測定した。“あなたが以下の人たちから得ているもので、他の人からでも得ようと思えば得ることができるものは思いつきますか?”と問い、4つの場面で接する他者との関係それぞれについて、“1:まったく思いつかない”から“5:よく思いつく”の5件法で回答を求めた。

さらに、“もし‘本当の自分’とは言えないような行動をしなければならぬ時、あなたはどのように感じますか?”という想定をさせたうえで、4つの場面それぞれにおいて“多面性への違和感”と“多面性の受容”の程度を以下のように測定した。“多面性への違和感”を測定する項目は“違和感を感じる”、“嫌だと思う”、“特に気にならない(逆転項目)”の3項目であり、“多面性の受容”を測定する項目は“まあ仕方ないと思う”、“やるしかないと思う”、“まったく納得できない(逆転項目)”の3項目である。

質問紙の最後では、性別、学年、年齢の回答を求めた。

結 果

以下の分析は122名のデータを用いているが、回答者の中にはサークル未経験者が8名いたため、“サークル”場面に関連する箇所のみ114名分のデータで分析を行った。

項目分析は以下のような結果であった。まず、自尊心尺度は α 係数が.83であり、内的一貫性は十分に高いと考えられるため、10項目の合計点を“自尊心”の得点とした。次に、“役割の内面化”を測定した4項目の α 係数は.81であり、内的一貫性は十分に高いと考えられるため、4項目の合計点を“役割の内面化”の得点とした。また、“手段性の認知”は1項目の回答結果をそのまま“手段性の認知”の得点とした。さらに、“多面性への違和感”を測定する3項目の α 係数は.83であり、内的一貫性は十分に高いと考えられるため、3項目の合計点を“多面性への違和感”の得点とした。最後に、“多面性の受容”測定する3項目の α 係数は.66であり、“まったく納得できない”という項目は合計点との相関係数も.31と低かったため、この項目を削除した。残る2項目の α 係数は.76であり、これらの合計点を“多面性の受容”の得点とした。

1つ目の検討課題である、“役割の内面化”と“多面性への違和感”との関連をみるために相関係数を算出したところ、4つの場面におけるそれぞれの平均得点を使用した場合には.20 ($p<.05$)であった。場面別にみると、“家族”と“サークル”場面において、役割が内面化しているほど多面性への違和感が強いという、いずれも有意な正の相関係数が見出された (Table 1)。

Table 1
他者との関係性に関わる得点と多面性に対する認知との相関係数

| | 全体 | 家族 | 学科の友人 | サークル | アルバイト |
|---------------------|-------|--------|-------|-------|--------|
| “役割の内面化”—“多面性への違和感” | .20 * | .28 ** | -.07 | .22 * | .02 |
| “手段性の認知”—“多面性の受容” | .15 | .20 * | .05 | .13 | .32 ** |

** $p<.01$, * $p<.05$

また、2つ目の検討課題である“手段性の認知”と“多面性の受容”との関連をみるために相関係数を算出したところ、5つの場面におけるそれぞれの平均得点を使用した場合には.15 (ns)であった。場面別にみると、“家族”と“アルバイト”場面において、手段性の認知が強いほど多面性の受容の程度も強いという、いずれも有意な正の相関関係が見出された (Table 1)。

最後に、“役割の内面化”と“手段性の認知”の程度が精神的健康に与える影響を検討するため、“役割の内面化”と“手段性の認知”の得点の中央値を基準として実験参加者を2群に分割し、“自尊心”を従属変数とした、2 (役割の内面化の程度：役割の内面化高群・役割の内面化低群) × 2 (手段性の認知の程度：手段性の認知高群・手段性の認知低群) の2要因分散分析を場面別に4回行った (Table 2)。その結果、“アルバイト”の場面では、“役割の内面化の程度”の主効果は無く、“手段性の認知の程度”のみ主効果が見られた。それ以外の場面においては、“役割の内面化の程度”と“手段性の認知の程度”の両要因それぞれからの有意な主効果がみられた。ただし“家族”場面における“手段性の認知の程度”の主効果は傾向差であった (F(1, 118)=3.32, p<.10)。いずれも、“役割の内面化の程度”では高群の方が、“手段性の認知の程度”では高群の方が自尊心の程度が高いという正の効果であった (Figure 1)。

Table 2
“役割の内面化”と“手段性の認知”の高低による“自尊心”の程度

| 場面 | “役割の内面化” の程度 | “手段性の認知” の程度 | n | mean | SD | “役割の内面化” 主効果 | “手段性の認知” 主効果 |
|-------|-----------------|-----------------|----|------|------|-----------------|-----------------|
| 家族 | 高 | 高 | 28 | 30.3 | 6.02 | 5.41 * | 3.32 † |
| | | 低 | 34 | 26.3 | 6.40 | | |
| | 低 | 高 | 32 | 25.7 | 5.39 | | |
| | | 低 | 28 | 25.8 | 5.55 | | |
| 学科の友人 | 高 | 高 | 34 | 29.7 | 4.80 | 7.20 ** | 5.67 * |
| | | 低 | 34 | 26.7 | 6.94 | | |
| | 低 | 高 | 27 | 26.4 | 5.88 | | |
| | | 低 | 27 | 24.3 | 5.45 | | |
| サークル | 高 | 高 | 38 | 29.5 | 6.29 | 4.33 * | 4.05 * |
| | | 低 | 24 | 25.9 | 6.76 | | |
| | 低 | 高 | 25 | 25.8 | 4.50 | | |
| | | 低 | 27 | 24.9 | 5.04 | | |
| アルバイト | 高 | 高 | 33 | 28.0 | 5.35 | 0.19 | 5.41 * |
| | | 低 | 29 | 26.8 | 6.20 | | |
| | 低 | 高 | 23 | 28.9 | 5.89 | | |
| | | 低 | 37 | 24.9 | 6.35 | | |

** p<.01, * p<.05, † p<.10

自己の一貫性と認知的不協和
—自己の多面性は必ず認知的不協和をもたらすのか—

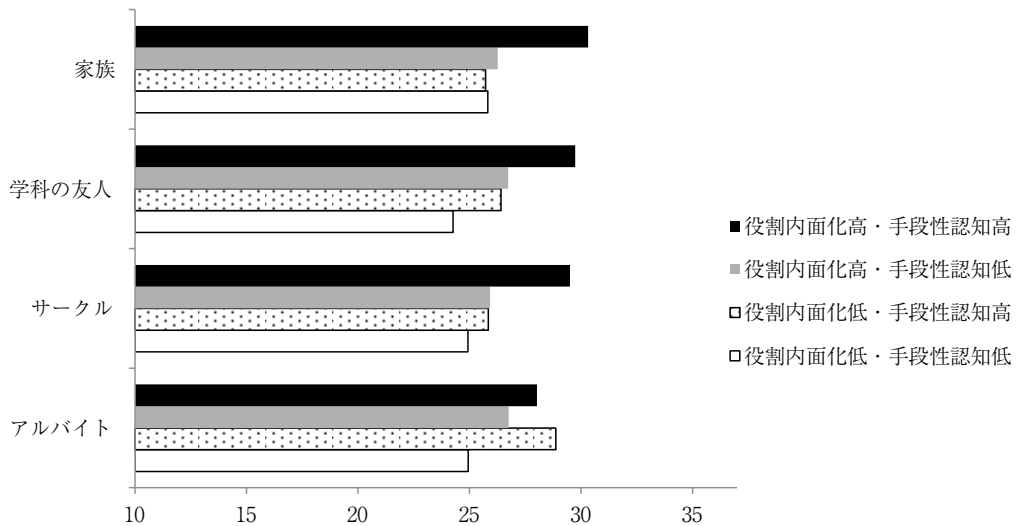


Figure 1 “役割の内面化”と“手段性の認知”の高低による“自尊心”の程度の比較

考 察

1つ目の検討課題である、“役割の内面化”と“多面性への違和感”との関連は、全体としても正の関連があり、場面別には、家族とサークル場面でも有意な正の相関関係がみられた。これは、前述の高石（2000）や渋川・松下（2010）が指摘するような、自己の多面性に対して葛藤が生じないという現象が、当該の状況で求められ、実行している言動が自分自身に因っていると感じられないような希薄な関係に由来しており、役割の内面化によってそれは一貫性を求める自己の一部になるという考えに沿った結果である。また、2つ目の検討課題である、“手段性の認知”と“多面性の受容”との関連も、全体としては関連がみられなかったが、場面別には家族とアルバイト場面で有意な正の相関関係がみられた。先行する田島（2008, 2010a, 2010b）の仮説と同様に、他者との手段的關係によって自己の多面性を統合することができるという考えに沿った結果である。

上記の結果について、予測に沿っていたのが家族、サークル、アルバイト場面に限られていたことは、今回の調査で学科の友人との関係を想起させた場合に、想起の候補となる対象者が複数存在し、自己との関係の深さや質に関する分散が大きいう原因によっている可能性がある。これらの場面における結果の差異が生じた原因についてはさらに詳細な検討が必要である。

役割の内面化と手段性の認知がそれぞれ精神的健康に与える影響について検討したところ、多面性への違和感を生み出すとも考えられる役割の内面化が高いことが自尊心の程度と正の関連にあった。役割の内面化は、内発的動機づけや内的な統制の所在にも関連すると考えられるので、自尊心を含めて精神的健康全般に正の関連をもつことは想像に難くない。一方で、役割の内面化は多面性に違和感

を持ち始めるといふ諸刃の刃を持つが、加えて、関係に手段性を認知することによって多面化した自己の側面は統合され、自尊心の低下を防止したと考えることができるだろう。

アルバイトという状況は、一般的な大学生にとっては唯一の労働場面であり、賃金を得るといふ目的的手段としてアルバイト先との関係を始めることがほとんどであると考えられる。多面化した自己の側面が増加しやすい状況であると推測されるため、役割の内面化は葛藤をもたらす負の影響も十分にあり、他の場面でみられたような自尊心への正の影響を相殺した可能性がある。

引用文献

- 浅野智彦 (2006). 若者の現在 浅野智彦 (編) 検証・若者の変貌：失われた10年の後に 勁草書房
- Erikson, E.H. (1959). Identity and the Life Cycle. *Psychological Issues*, **1**, 1-171.
- 福重清 (2006). 若者の友人関係はどうなっているのか 浅野智彦 (編) 検証・若者の変貌：失われた10年の後に 勁草書房
- Kanagawa, C., Cross, S.E., & Markus, H.R. (2001). "Who am I?" The cultural psychology of the conceptual self. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **27**, 90-103.
- Kashima, Y., Kashima, E., Farsides, T., Kim, U., Strack, F., Werth, L., & Yuki, M. (2004). Culture and context-sensitive self: The amount and meaning of context-sensitivity of phenomenal self differ across cultures. *Self and Identity*, **3**, 125-141.
- Lecky, P. (1945). *Self-consistency: A theory of personality*. New York: Anchor Books.
- 岡田努 (2007). 現代青年の心理学—若者の心の虚像と実像 世界思想社
- Rogers, C.R. (1951). *Client-centered Therapy—Its Practice, Implication, and Therapy*. Boston; Houghton Mifflin Company.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton Univ. Press.
- 渋川瑠衣・松下姫歌 (2010). 大学生における自己の変動性・多面性の概念について—学生相談における臨床的理解と意義の視点から 広島大学心理学研究 **10**, 171-183.
- Suh, E.M. (2002). Culture, identity consistency, and subjective well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, **83**, 1378-1391.
- 砂田良一 (1979). 自己像との関係からみた自我同一性 教育心理学研究 **27**, 215-220.
- 田島司 (2008). 自己のパーソナリティへの関心を高める要因について—課題のあいまいさとパーソナリティの多面性との関連 日本心理学会第72回大会発表論文集 210.
- 田島司 (2010a). 自己概念の多面性と精神的健康との関係—女子大学生を対象とした調査— 心理学研究 **81**, 523-528.
- 田島司 (2010b). 自己概念の多面性と統合 日本社会心理学会第51回大会発表論文集 368.
- 高石恭子 (2000). ユースカルチャーの現在 小林哲郎・高石恭子・杉原安史 (編) 大学生がカウンセリングを求めるとき—こころのキャンパスガイド ミネルヴァ書房
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究 **30**, 64-68.

JOURNAL OF
THE FACULTY OF HUMANITIES
THE UNIVERSITY OF KITAKYUSHU
(HUMAN RELATIONS)

Vol. 20

CONTENTS

Tsukasa Tajima

Self-consistency and cognitive dissonance:

Multiplicity of the self always cause cognitive dissonance? 49

Published
by The Faculty of Humanities
The University of Kitakyushu
Kitakyushu, Japan
March 2013